北信教育事務所だより

<mark>~子どもに発し、子どもに</mark>還る 学校づくり・授業づくり<mark>~</mark>

共に拓く

多様性を包み込む学級づくり~通常学級の特別支援教育~

小・中学校には、通常の学級、特別支援学級、通級指導教室等、多様な学びの場があります。 皆さんの学校では、「誰が」「どこの場で」「どのように学ぶか」等を検討するための校内支援 体制や情報共有は、いかがでしょうか。特別な教育的ニーズのある子どもたちも含め、どの子も 目を輝かせて力を発揮できる授業を構想することが大切です。そのひとつの考え方が「授業のユ ニバーサルデザイン化」です。合理的配慮(個別の支援)の前に、すべての子どもにとって、参 加しやすい学級づくり、分かりやすい授業づくりをします。

入級・通級利用を検討する前に、 学級づくりを見直してみましょう



- 🗢 ・グループ活動が苦手
 - ・ 衝動的な言動が多い
 - ・場面の切り替えが難しい
 - 授業中に席を離れてしまう

教師が支援に困っている

困っているのは 子ども

授業のユニバーサルデザイン化を 図りましょう



○担任一人では、対応が難しい ○特別支援学級に入級した方が いいのかな



「適切な学びの場」 ガイドライン

日滝小学校の実践から

| 年生算数 単元名:「ものと ひとの かず」 【授業のユニバーサルデザイン化】(どの子にも の視点)

・ | 時間の授業の流れを提示 (授業への見通しと安心)

- ・導入でIOまでの数のフラッシュカードを実施
- ・前時の内容(既習事項との関連)の掲示
- ・学習問題の焦点化

(全体でキーワードを確認して下線を引く)

- ・ICT機器を活用し、友だちの考えを共有(視覚支援)
- ・黒板に書いてある「もんだい」を手元における工夫
- ・計画的な机間指導と声がけ
- ・分からないと言える学級の雰囲気 5もかさんの うしろには

かさんは まえから 3ぱんめに ならんでいます。

nhlad

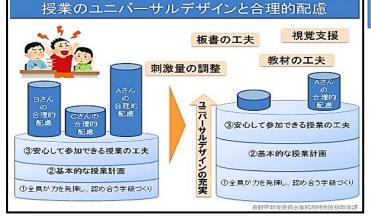
みんなで なん人 ならんで いますか。

【合理的配慮】(個別 の視点)

- ・本時で願う姿(つけたい力)を個別に設定
- ・評価場面、評価内容を個別に設定
- ・個別の補助プリントを用意
- ・「もんだい」を一文ずつ提示
- 数の概念形成に困難さがあるため、手がかりとなるスケールをノートに貼り付ける



「授業のユニバーサリアングラックでは、 デザイの中で築かれ、 (では、) がは、) がは、) がは、) がでいるがでいるがでいるがでいるがでいるがでいるができませる。 がでいるができませる。 ができまが、。



こちらも参考にしてみましょう





各学校に1冊 配布されています

I CTの 活用

同時共同編集機能を活用し、一人ひとりが 「問題を見いだす力」を働かせる授業づくり

豊野中学校2年生の理科「消化のしくみ」の学習場面。担当の 西澤先生は、理科の「思考力・判断力・表現力等」として育成を 目指す**「問題を見いだす力」**を一人ひとりが働かせて学ぶ授業づ くりを目指しています。

まず、一人ひとりに鰹節とご飯を渡し、それぞれを口に入れて 30 回ずつ噛み、味の変化を比較する場を設けました。続いて、 気付いたことを学級全体で共有すると、生徒は「ご飯は噛むと



甘くなるけど、鰹節は甘くならない」など、その相違点について発言しました。ここで西澤先生は「今日は、ご飯の変化について気付いたことをもとに自分達で学習問題をつくるよ」と伝えます。生徒はタブレットで付箋アプリ(ジャムボード)を立ち上げ、グループごとのシートに一人ひとりが自分で考えた問題を書き込んでいきました。最初はどのように考えたらよいか見通しをもてなかった生徒も、同じ班や他班の友達の書き込みを自由に閲覧し、それらを比較したり参考にしたりすることで、自分なりの問題を見いだしていきました。さらに、それらの付箋を動かしたりまとめたりしながら、個人で考えた問題をもとにグループの学習問題を設定しました。このように、同時共同編集機能の活用が育成を目指す力を十分に働かせる姿につながっていきました。

同時共同編集機能を活用し、一人ひとりが育成を目指す力を十分に働かせて学ぶ西澤先生の授業づくりに学びたいと思います。

I CTの 活用

Web 会議システムを活用し、 空間を越えた言語活動を実現!

野沢温泉中学校1年生の外国語の授業場面。担当の下田先生は「レベッカ先生のお兄さんや友人に野沢温泉村のことを伝えよう」という Lesson Goal を設定し、話すこと [やり取り] の言語活動に焦点を当てて単元を構成しました。Web 会議システムで、レベッカ先生の故郷であるアメリカとつながりました。生徒たちは写真をもとに野沢温泉の魅力を説明しながらやり取りをしました。

あるグループは1回目のやり取りが終わった後に、自分たちのやり取りについて振り返りました。「〇〇さんが言っていた I'd like to を使おう」「『~食べた?』って Did you を使えばいいよね?」など、既習表現を確認する意見が出されました。「テンションを上げてはっきり話そう」「写真の角度を変えよう」

など、相手を意識した意見も出てきました。その後2回目のやり 取りをすると、生徒が話す英語に大きな変化が見られました。

終末、アメリカの方々の「Good Bye.」のあいさつに対して、 生徒たちは「Good night.」と返していました。何気ない言葉から「夜中にもかかわらずありがとう、ゆっくり休んでね」という 相手を思いやる優しさが感じられました。

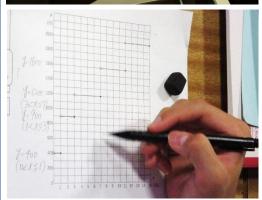
「空間を越えた」学びの場を作り出せることは ICT の強みの 1つです。外国に行かなくても、生の英語に触れ、「英語が聞き取れた、通じた」という喜びを感じることができます。



授業改善 一初任者の 授業から一

生徒に数学の有用性を感じてほしい…。





屋代中学校数学科では、生徒が自分の問題として考えたくなるような題材を工夫することにより、生徒自ら課題を見つけ、根拠をもとに説明する力を育成する授業づくりに取り組んでいます。そのような中で、初任者の山下先生は、**生徒が数学の有用性を感じる授業をしたい**と考えています。

10月15日の授業は、3年生「いろいろな関数」の小単元の学習でした。「スマートフォンの料金プラン」を題材に、それぞれデータ使用量が異なる3人の先生に適した料金プランを考える授業を行いました。生徒たちは、示された2つのプランについて、データ使用量と料金の関係をグラフに表現しながら、どのプランがそれぞれの先生に適しているかについて、階段状のグラフを比較しながら、説明していきました。

山下先生は、授業の冒頭で、ある携帯電話会社の実際のテレビ CM を動画で示し、階段状のグラフについて生徒の興味関心を惹きつける工夫も行っています。生徒が「わかる・できる・使える」を実感し、数学の有用性を感じる授業づくりに向けた山下先生の挑戦が続きます。

授業改善 -日々の授業改善 研修から一

校内・校外の研修から授業改善のヒントをつかむ

高社小学校の小林先生は、6月の「日々の授業改善研修」に「登場人物の心情を想像できる言語活動」を課題として参加し、登場人物のイラストを目盛りの上に置き、その心の距離を叙述から説明する演習を行いました。小林先生は研修を終えて「丁寧な授業準備をすることと、教室で子どもと一緒に学習を展開することが魅力ある授業づくりだ」という感想を残しました。

2学期。小林先生は「ごんぎつね」の教材研究として、登場人物が一日を振り返ることを想定した「ごん日記」を書き始めました。授業で子どもが行うのと同じ言語活動を教師も行い、着目する叙述を想像し、

つまずきに対する声がけを考えました。

10 月の授業当日、付箋ツールが表示されたタブレットの画面には、「ごん」と「兵十」の顔のアイコンが置かれ、子どもたちは指で自由に動かしています。両者の心の距離をつかんだ子どもは、新たな付箋を作成し、根拠となった叙述を入力します。A さんは「ごん」と「兵十」のアイコンを、寄り添わせるように並べ、「二人はこの時、一緒に後悔していたんだと思う」と、友だちの方に画面を向けて、



叙述と共に関係を説明しました。子どもたちが「ごん日記」を通して高めてきた、心情を読み取り、表現する力が発揮された瞬間でした。**このように校内、校外での研修を重ねて授業改善を図る小林先生**の教室で、子どもたちは自ずと「ごんぎつね」の魅力を語り合っていました。

シリーズ ~新たな教育を切り拓く学び~

個別最適な 学び

自分で学ぶ方法を選択し、自律して学ぶ子ども

豊洲小学校6学年、社会科の授業。担任の中澤先生は、子どもが課題解決に向けて自律して学んでいくことを願って、明治の国づくりを進めた大久保利通などの働きによって社会がどのように変化したのかを追究する授業を構想しました。

授業での子どもたちは、**自分で選択した方法で追究**していきました。 教科書の本文を確認する子ども、タブレットPCを使って難しい語句を 調べる子ども、NHK for School を視聴する子どもなど、一人ひとりが



集中して取り組んでいました。教室が静まり返る中、中澤先生は、教室全体を見渡せる位置から子どもの様子をつぶさに観察し、支援が必要だと感じた子どものもとに近づき声がけをしていました。大久保利通についてまとめていたWさんには、「もしWさんが大久保だったら、同じように進められる?」と問いかけます。Wさんはプリントにまとめた内容をじっと読み返し、大久保の改革が明治の時代に果たした意味を考え、「大久保はすごくたくさんのことをやっていて、大久保のようには行動できない」とプリントに記述しました。大久保利通の働きを捉え直し、自分の考えを深めた姿でした。

問題解決に向けて、一人ひとりが学習計画を立て、追究に必要な学びを自分で選択できるようにし、タブレットP C も含めて様々なものを活用して調べ考えられるようにしていました。多様な学びを支える環境が整えられていたことが主体的に学ぶ子どもの姿を生みだしていました。子どもが自律して学ぶ授業をどうつくるか、中澤先生の授業改善に学びたいと思います。

協働的な学び

願いの共有が、創造的な話し合いにつながる

飯綱町立牟礼小学校3年生は、郷土食である「やたら」と出合いました。総合的な学習の時間で、夏野菜を大根の味噌漬けと和えた「やたら」を作ってみようと、子どもたちと担任の松本先生と徳永先生は、協力して野菜を育て、作り方を保存会の方に教えてもらってきました。野菜が収穫できるようになると、使う野菜の比率や調味料の量を調整して、オリジナルレシピを完成させました。保存会の方から「家で食べる人が減っている」ことを教わると、「おいしい『やたら』を広めたい」と広報活動が始まりました。「ポスターをどこに貼ったらよいか」をグループで考えると、「人が多いところがいいね」「だったら、バス停はどうかな」「コミュニティセンターもよさそう」「温泉にも来るよ」「レストランもいいねぇ」と、人が集まりそうな場所について、アイデアが膨らんでいきました。さらに、「コンビニもいいな」「それならスーパーも」という意見が出されると、「じゃ、農産物直売所も」とアイデアが広がりました。

やり取りを聞いた徳永先生は、「どうして直売所なの?」と問い返しました。「直売所には、野菜がたく

さん売っているんだよ」「そうそう。野菜買った人に、『やたら』作ってみたいなって思わせるんだよ」「スーパーも、『やたら』の材料を売っているからね」と、場所を選んだ根拠が語られていきました。

「『やたら』を広めたい」という**願いを共有した仲間同士での話し合い活動によって、**「人が集まるところ」から「野菜を購入できるところ」と、**創造的にアイデアを生む**ことができました。「よし、ポスター貼りに行こう!」と微笑む姿から、「一緒に学ぶっていいな」という思いが伝わってきました。

